

群 教 セ	G09 - 02
	平 22. 242集

中学校英語科における「書く力」を高める 指導法の工夫

— 四技能を関連付けた学習活動を通して —

長期研修員 唐澤 光貴

《研究の概要》

本研究は、中学校第2学年の英語学習において、「書く力」を高めるために、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」の三技能を、それぞれ「書くこと」と関連付けた学習活動を行ったものである。具体的には、まず音声と文字を一致させ、次に英語特有の語順を意識させ、最後に5W1Hの視点で英文を書く活動を行い、感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文がより多く書けるようになることを目指し、「書く力」を高めるための指導法を工夫した。

キーワード 【英語—中 書くこと 四技能 関連付け】

I 主題設定の理由

平成20年3月に告示された中学校学習指導要領外国語の目標には、「…積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」とある。また、群馬県教育振興基本計画（平成21年～25年）においても、中学校英語教育の課題として、生徒の「聞く」「話す」「読む」「書く」の四技能のバランスを図りながら、コミュニケーション能力を養うこととなっている。これまでの「聞くこと」「話すこと」の重視から、「読むこと」「書くこと」も含めた四技能の総合的な育成が一層求められている。

現行の学習指導要領では「聞く」「話す」活動に重点が置かれているため、「読む」「書く」活動が十分ではなかった。新学習指導要領解説では、発信力の育成を目指すためには、「話す」活動に加え、「書く」活動の充実が重要であることが示されている。大阪教育大学の吉田晴世教授（2007）は、「話すこと」と「書くこと」について、「書くこと」は、つづりの正確さ、文法的・語順の正しさ、論理の首尾一貫性が求められるので、「話すこと」より難しいと述べている。

協力校の生徒の実態を見ると、自己紹介や自分の意見などを「書く」活動において、単語のつづりや語順などに不安を感じたり、何を書けばよいかわからない生徒が多い。その原因として、次の三つのことが考えられる。まず、今までの授業が音声重視であり、生徒は音声と文字が十分に一致できていないことが考えられる。次に、「話す」活動では、語順や文法的な正確さより、会話を継続させることのほうが重視されているので、単語やキーワードのみで答えることが多く、語順や文法の認識が十分ではないので、文を構成することが苦手である。また、まとまりのある文章を書く際に、どのような視点で文を書けばよいのか分からない。

そこで、本研究では、「書く力」を高めるための三年間を見通した指導計画を作成し、「書くこと」と他の三技能を関連付けた指導法を探る。「書くこと」と他の三技能とを関連付けた学習活動の有効性を明らかにし、その指導法を提案したいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

中学校の英語学習において、「書くこと」と他の三技能とをそれぞれ関連付けた活動を行うことによって、生徒の「書く力」が高められることを、授業実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

- 1 「聞くこと」と「書くこと」を関連付けるために、言語材料を習得する段階において、ICT機器を活用する。画面上に英文を映し出し、それと同時に音声流して、単語や※チャンク単位で書き取る活動を繰り返し行えば、音声と視覚でとらえた文字が一致し、正確なつづりで単語やチャンクを書くことができるだろう。

※チャンク 意味のまとまり

- 2 「話すこと」と「書くこと」を関連付けるために、言語材料を習得する段階において、生徒に英問英答の会話活動をさせる。会話で使ったチャンクを基に単語を補って文を書かせる手順を段階的に示していけば、英語の語順を理解し、正しい語順で英文を書くことができるだろう。

- 3 「読むこと」と「書くこと」を関連付けるために、言語材料を活用する段階において、5W1Hの視点で様々な情報を盛り込んだモデル文を読ませる。それを基に英文を書く際に5W1Hの視点をもつことで、感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文をより多く書くことができるだろう。

Ⅳ 研究の内容

1 基本的な考えかた

(1) 「書く力」とは

「書く力」を、大きく二つの側面からとらえる。表記に関する面と、内容に関する面である。研究にあたり、中学校三年間での「書く力」の指導計画を下の表のように設定した。まず、表記の面からとらえた「書く力」とは、一年生では、正しいつづり・語順・文法で符号を適切に使って英文を作成することができる力である。二年生では、チャンクを意識して、正しい語順で文を作成することができる力である。三年生では、学校紹介や感想文など、それぞれの内容に沿った書式で、つなぎ言葉などを必要に応じて使い、文章を構成することができる力である。次に、内容の面からとらえた「書く力」とは、一年生では、自分の伝えたいことを文で表現できる力である。二年生では、より具体的に自分の体験・考えや意見を英文として作成できる力である。三年生では、読み手を意識しながら、自分の体験や意見を論理的に首尾一貫した文章に作成することができる力である。な

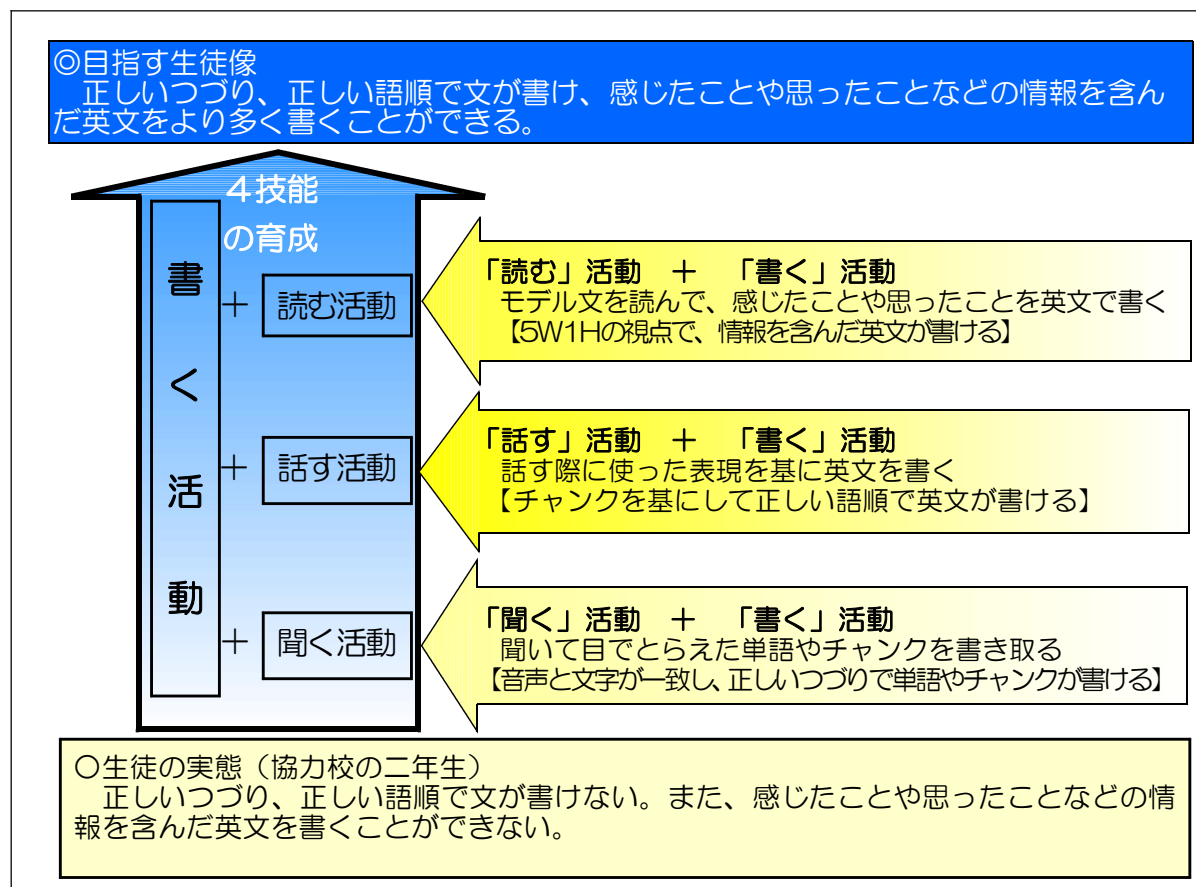
「書く力」を高めるための三年間を見通した学年目標と指導項目及び具体的な活動例				
	○学年目標	○表記に関する面	○内容に関する面	○具体的な活動例
一年	正しい語順とつづりで、自分のことや自分にかかわることなどについて、書くことができる。	・アルファベット（大文字・小文字）を正しく書くことができる。 ・符号（ピリオド・疑問符など）を適切に使うことができる。 ・正しいつづりで書くことができる。 ・正しい語順で書くことができる。 ・正しい文法で書くことができる。	・自分のことについて書くことができる。 ・友達や家族など、自分の身近なことについて書くことができる。 ・自分の伝えたい情報を基本的な構文などを使って書くことができる。	・自己紹介（聞・話・書） ・友達・家族紹介（聞・話・書） ・地域紹介（読・話・書） ・日記（読・書） ※（ ）内は、「書くこと」と「聞くこと」「話すこと」「読むこと」との組み合わせを示す。
二年	意味のまとまりを考えながら、自分が体験したことなどについて、意見や考えを入れて書くことができる。	・1年の内容に加えて、 ・チャンク（意味のまとまり）を意識して書くことができる。	・自分の体験について詳しく書くことができる。 ・自分の考えや意見などの情報をより多く含んだ文を書くことができる。	・日記（読・書） ・夏休みなどの予定の説明（聞・話・書） ・思い出語り（聞・話・書） ・自分の将来について紹介（聞・話・書） ・物語などの紹介（聞・話・書） ・文化の比較について説明（聞・話・書）
三年	状況に応じて適切な書式や様式で、論理的に首尾一貫した英文を書くことができる。	・1・2年の内容に加えて、 ・状況に応じた書式や様式で書くことができる。 ・つなぎ言葉などを適切に使って書くことができる。	・読み手を意識して、自分の体験や意見について書くことができる。 ・論理的に首尾一貫した文章を書くことができる。 ・文と文のつながりに注意して書くことができる。	・経験などを含んだ自己紹介（聞・話・書） ・旅行記（読・書） ・学校や名所などの紹介・説明（聞・話・書） ・道案内（聞・話・書） ・ものや事柄の描写や説明（聞・話・書） ・感想文（読・書） ・新聞作成（読・書） ・手紙・メールの作成（読・書）

お、今回の研究では、協力校の二年生を対象として授業実践を行い、生徒が正しい表記で、意味のまとまりを考えながら、自分が体験したことなどについて、意見や考えを含んだ英文をより多く書くことができるように指導を行った。

(2) 「書くこと」と三技能を関連付けた学習活動とは

英語を学ぶ上で重要なことは、一つの技能だけを特化して伸ばすことではない。新学習指導要領に、「四技能を統合的に育成する」とあるように、「聞く」「話す」「読む」「書く」の四技能を、それぞれ有機的に組み合わせて使いながら、習得していくものである。例えば、口頭で自己紹介を行う学習活動において、突然生徒に「英語で家族の紹介をしなさい」といっても、まとまった英語がすぐには出てこない。実際に家族を紹介する場合には、モデルとなるスピーチを「聞いて」、何について話すかを考え整理する。そして、話したいことを英文にし、書いたものを「読み」、発表するという、複数の活動を結び付けることになる。生徒は、英文を「聞いて」「書く」、「書いて」「話す」、若しくは「読んで」「書く」など、複数の活動を組み合わせることにより、英語を自分のものとして習得するのである。以上の見地から、本研究における「書くこと」と三技能を関連付けた学習活動とは、「書く」活動に、「聞く」「話す」「読む」それぞれの活動をバランスよく関連付けたものとし、これによって、「書く」技能と同時に他の三技能も総合的に高められると考える。

2 研究構想図



V 研究の計画と方法

1 授業実践計画

対 象	中学校 第2学年
期 間	平成22年9月27日(月)～10月7日(木) 6時間 (1クラス)
題材名	「PROGRAM 4 With Love and with Joy」 SUNSHINE ENGLISH COURSE 2 開隆堂出版
授業者	長期研修員 唐澤光貴

2 検証のための生徒群(二年生1クラス・25名)

A 群 (7名) 28%	○学習に意欲的で、基礎的な知識が身に付いている。 ○正しいつづりや語順で英文を書くことができる。 ●自分の意見や考えを英語で十分表現することができない。 ↓ 【感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文を、5W1Hの視点でより詳しく書くことができるようにさせたい。】
B 群 (13名) 52%	○英語に対する学習意欲はある。 ●つづりや語順をとるとき間違える生徒が見られる。 ●テーマについて、自分の意見や考えなどの情報を含んだ英文を書くことができない。 ↓ 【モデル文を参考に、つづりや語順に注意して、情報を含んだ英文をより多く書くことができるようにさせたい。】
C 群 (5名) 20%	●学習に消極的で、基礎的な知識が定着していない。 ●正しいつづりで書くことができず、語順も理解できていない。 ●与えられたテーマについて自力で英文を書くことができない。 ↓ 【単語やチャンクに注意しながら、モデル文を参考に英文を書くことができるようにさせたい。】

3 検証計画

	検証の観点	検証の方法
見 通 し 1	ICT機器を活用して、画面上に英文を映し出し、それと同時に音声を通して、単語やチャンクを繰り返し書き取る活動は、音声と視覚でとらえた文字を一致させ、正確なつづりで単語やチャンクを書くことについて有効であったか。	ワークシートの内容分析 自己評価カードの結果分析
見 通 し 2	本文の内容について英問英答で「話す」活動をし、その中で使用したチャンクを基にして、段階的に文を作成することは、生徒が正しい語順で英文を書くことについて有効であったか。	学習活動の記録(ビデオ分析) ワークシートの内容分析 自己評価カード
見 通 し 3	英文を作成する段階において、5W1Hの視点で書かれたモデル文を読んでから英文を書くことは、感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文をより多く書くことについて有効であったか。	ワークシートの内容分析 自己評価カードの結果分析

4 題材の目標及び評価規準

目 標	(1)物語を聞いたり、書いたりする活動を通して、音声と文字を一致させ、英文を書ける。(①) (2)物語を読んで、概要や要点をつかみ、正しい語順で英文を作成することができる。(②) (3)マザーテレサの業績を知り、助け合うことの大切さや、偉大だと思う人物について考え感じたことや思ったことを、英文で書ける。 (4)「夏休みの思い出」という題材で、5W1Hの視点で、感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文をより多く書ける。(③) ※()内の数字は、見通し1・2・3を示す。			
評 価 規 準 (書くこと)	関心・意欲・態度 (言語活動への取組) 間違えることを気にせず、自分の考えを書こうとする姿勢で学習活動に取り組んでいる。	表現の能力 (適切な表記) つづりや語順を正しく使い、伝えたいことを適切に書ける。 (まとまりのある英文) 5W1Hの視点で、感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文が書ける。	理解の能力 (正確な読み取り) 教科書本文の概要を理解している。	知識・理解 (言語についての知識) 語順について理解し、英文が書ける。

5 指導計画(全6時間)

時	学習活動(丸数字は見通し)	◎指導上の留意点	○評価規準
1	○Program 4-1の音声を聞いて単語やチャンクを書く活動(①) ○英問英答による内容理解(②)	◎プレゼンテーションソフトを使い、音声を繰り返し聞かせることで、ワークシートに単語やチャンクを正しいつづりで書けるようにさせる。 ◎内容についての英問に対して、チャンクを意識して答えさせる。	○画面の文字を見ながら音声を聞いて、単語やチャンクが正しく書ける。 ○本文についての質問に対してチャンク単位で答えることができる。
2	○Program 4-2の音声を聞いて単語やチャンクを書く活動(①) ○英問英答による内容理解(②)		
3	○Program 4-3の音声を聞いて単語やチャンクを書く活動(①) ○英問英答による内容理解(②)		
4	○Program 4の内容について自分の感想や考えを伝える活動 ○課を通して感じたことや思った	◎本課を通して、マザーテレサについて感じたことや思ったことを文にする。	○マザーテレサについて、感じたことや思ったことを3文以上書くこと

	ことを書く活動 (③) ○グループで自分の考えを伝える対話活動	◎グループになって自分たちの感想を伝え合い、お互いの考えを共有させる。	ができる。 ○グループで話し合った後、友達の考えを理解し、考えを深めることができる。
5	○モデル文を見て、伝える内容を理解し、感じたことや思ったことを考え整理する活動 (③)	◎5W1Hの視点で作成したモデル文を生徒に示すことによって、書き始める準備として、感じたことや思ったことを生徒に考えさせる。	○感じたことや思ったことを考え、整理できる。
6	○作文活動 (③) 「夏休みの思い出」	◎モデル文を参考にして、5W1Hの視点で英文を作り、感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文を作成させる。	○5W1Hの視点で、感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文が書ける。

VI 研究の結果と考察

1 ICT機器を活用して、画面上に英文を映し出し、それと同時に音声を流して、単語やチャンクを繰り返し聞いて書き取る活動は、音声と視覚でとらえた文字を一致させ、正確なつづりで単語やチャンクを書くことについて有効であったか。

(1) 学習活動の観察から(ワークシート分析)

生徒のワークシートの内容を一時間目と三時間目で比較した。生徒は音声を聞きながら画面上の単語やチャンクをワークシートに書き取った。以下は、A～C群のワークシートへの書込みである。

A 群 の 生徒	1 Mother Teresa began her work / (for children) / in Kolkata / in 1948. 時間 In some parts of the city, / the people were very poor / and / (they had no schools) / for their children. 目 Mother Teresa gathered together some children / (and taught alphabet) / to them. It was not easy / (because) / they had no pens / (and no notebooks) . ※the の欠如
	In 1950, / Mother Teresa (started) / the Missionaries of Charity. 3 Its motto is / " (Go to the poor) / with joy. / Say yes / to peace." 時間 In 1979, / (she received) / the Nobel Peace Prize. 目 (She died) / in 1997, / but even now, / the missionaries are working / (all over the world). (They are working) / in Japan / too. (For example) , / they have a house / for homeless children / in Tokyo. ※ミスなし
B 群 の 生徒	1 Mother Teresa began her work / (for children) / in Kolkata / in 1948. 時間 In some parts of the city, / the people were very poor / and / (they had no schools) / for their children. 目 Mother Teresa gathered together some children / (and taught the alphabet) / to them. It was not easy / (because) / they had no pens / (and no notebooks) . ※つづりミス
	In 1950, / Mother Teresa (started) / the Missionaries of Charity. 3 Its motto is / " (Go to the poor) / with joy. / Say yes / to peace." 時間 In 1979, / (she received) / the Nobel Peace Prize. 目 (She died) / in 1997, / but even now, / the missionaries are working / (all over the world). (They are working) / in Japan / too. (For example) , / they have a house / for homeless children / in Tokyo. ※ミスなし
C 群 の 生徒	1 Mother Teresa began her work / (for children) / in Kolkata / in 1948. ※つづりミス 時間 In some parts of the city, / the people were very poor / and / (they had no schools) / for their children. 目 Mother Teresa gathered together some children / (and taught alphabet) / to them. It was not easy / (because) / they had no pens / (and no notebooks) . ※つづりミス
	In 1950, / Mother Teresa (started) / the Missionaries of Charity. 3 Its motto is / " (Go to the poor) / with joy. / Say yes / to peace." 時間 In 1979, / (she received) / the Nobel Peace Prize. 目 (She died) / in 1997, / but even now, / the missionaries are working / (all over the world). (They are working) / in Japan / too. ※つづりミス (For example) , / they have a house / for homeless children / in Tokyo.

図1 各群生徒のワークシートの書込み ※ ()内は生徒が音声を聞いて書き込んだ部分

A群の生徒については、一時間目では定冠詞 the を付け忘れるなどといった誤答が見られた。しかし、三時間目では、与えられた設問すべてを間違いなく解答した。B群の生徒については、一時間目では、alphabet を alfabet としたつづりの間違いなどが見られたが、三時間目ではA群の生徒と同様、すべて間違えずに解答した。C群の生徒については、一時間目では、children を childnen、taught を taugha、などの複数のつづりミスが見られたが、三時間目では、つづりミスは一箇所になった。いずれの生徒群も、読みの練習を十分に行ったことで、音声とつづりの関係に気付き、音声と文字を一致させ、正確なつづりで書くことができたと思われる。

右の図2は、各A～C群の全問正答率の変化を示したものである。どの群も、正答率は増加していることが分かる。特にA群では13%の大幅な増加が見られた。また、B群、C群共に、80%以上の正答率を得ることができた。特に下位群については、三時間目では90%をこえる結果となった。

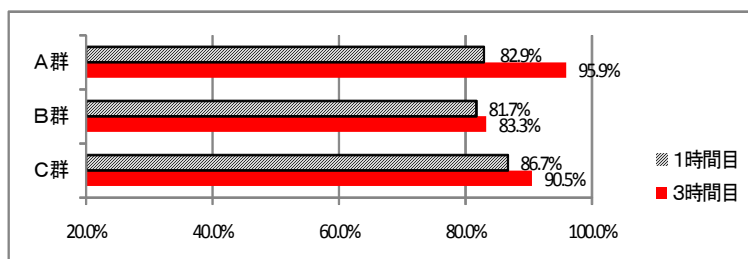


図2 各群生徒の一時間目と三時間目の正答率の比較

(2) 自己評価カードの結果から

一時間目と三時間目に行った授業後の自己評価カードを見ると、「1. 画面上の本文にあわせて、大きな声ではっきりと読む練習ができたか」という質問に対して、一時間目の自己評価では、「とてもよくできた」「まあまあできた」と回答したのは、合わせて全体の約95%であった。それが、三時間目では、90%に減少している。また、「2. 音と単語のつづりを理解し、正しく書くことができたか」という項目については、一時間目では、「とてもよくできた」「まあまあできた」と回答した生徒は、合わせて全体の約85%だった。しかし、三時間目では、95%に増加している。

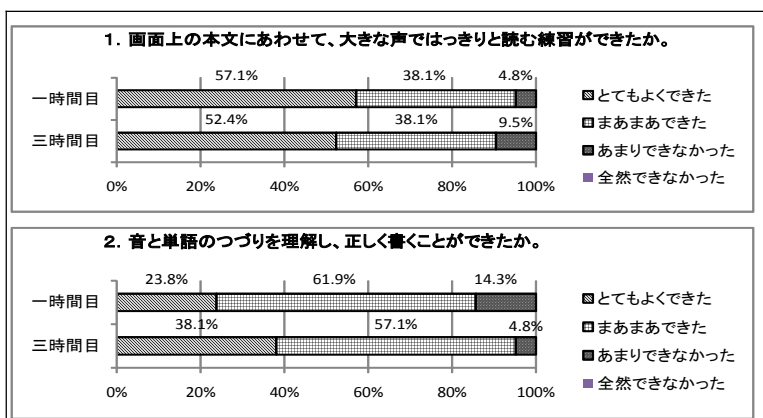


図3 一時間目と三時間目の自己評価の比較

自己評価カードの生徒の感想は下記のとおりである。生徒の多くが、この活動に対して、好意的にとらえ、積極的に取り組めたことが分かる。

- ・画面を見て、英文を読んでみると、意外と読めたのでよかった。(B)
- ・画面に出てきた単語をしっかりと読むことができた。(B)
- ・単語のつづりを正しく理解ししっかりと単語が書けた。(B)
- ・今日はよく読めたし、書いてよかった。(C)
- ・文を書くのが苦手なので、この授業でやったやり方は少しやりやすいかなと思った。(B)
- ・全然読めなかったのに、スラスラ読めるようになった。うれしいです。(A)

※()内は、生徒群を表す

図4 自己評価カードの生徒の感想(一部抜粋)

以上のように、ワークシートや自己評価カードの結果から、ICT機器などを活用して、音声と同時に文字を映しながら聞いて、単語やチャンクを書き取る活動が、音声と文字を一致させ、正確なつづりで単語やチャンクを書く活動に有効であったということが分かる。また、ICT機器などを活用することで、生徒は、音声を聞いて画面上の文字を認識し、書く活動にスムーズに取り組むことができた。また、チャンクという単位は意味のまとまりであると同時に発音のまとまりであるので、書き込みを行う際に、生徒は音声と一致させることが容易になった。そのため、これまでチャンク

単位で書く活動が不足していた生徒にとっては、活動回数を重ねるごとに、その成果が表れてきた。このことから、生徒は音声と文字を一致させて正しいつづりで書くことができたということが分かる。

2 本文の内容について英問英答で「話す」活動をし、その中で使用した英文からチャンクを抜き出し、それを基にして文を作成することは、生徒が正しい語順で英文を書くことについて有効であったか。

(1) 学習活動の観察から(ビデオ分析)

生徒に本文の内容についての質問文と、解答を書くためのワークシートを配付し、相手に質問ができるように口頭で練習した後、ペアになって英問英答活動を行った。次に英文を書く際に、チャンクやキーワードを段階的に加えながら、文を作成した。段階的に文を作る際、特にチャンクに注目して英文を作るよう指導した。その結果、教師の指示だけでなく、生徒どうしで、『世界中』ってどう言うの?」「all over the worldだよ」というふうに、会話に使用した表現をチャンクで教え合いながら、活動に取り組む様子が見られた。

(2) 学習活動の観察から(ワークシート分析)

英問英答の活動後に、段階的に英文を作成するためのワークシートを用意した。ワークシートの活動例と、生徒が記入した内容は以下のとおりである。

(例) 英問1: What did Mother Teresa do for some children? ※囲まれている部分は、追加された単語やチャンクを示す		
【step1】何をした? 「した」 の上に入れよう。(過去形にしてね) 1. <u>taught the alphabet</u> が した に	○教科書の内容についての質問に対して、三段階で単語やチャンクを追加し、正しい語順で英文を作成する。	
【step2】だれが? 「が」 の上に入れよう。(1語) 2. <u>She</u> taught the alphabet が した に	○英問に対して、答えの中心となるもの(例では、「何をしたか」が答えの中心となる)から、単語やチャンクを追加していく。	
【step3】だれに? 「に」 の上に入れよう。(2語) 完成! 3. <u>She</u> taught the alphabet <u>to them</u> が した に	○段階的に指定された部分に単語やチャンクを追加していくことにより、語順の正しい英文が完成する。	
A群の生徒 【何をした?】 taught the alphabet 【だれが?】 she 【だれに?】 to them ↓ She taught the alphabet to them. ※正答	B群の生徒 【何をした?】 taught alpabet 【だれが?】 she 【だれに?】 to them ↓ She taught <u>alpabet</u> to them. ※つづり及び the の付け忘れミス	C群の生徒 【何をした?】 taught the alphabet 【だれが?】 she 【だれに?】 some children ↓ She taught the alphabet <u>some children</u>. ※前置詞+代名詞への変換ミス(to them)

図5 設問に対する回答方法の例と各群生徒のワークシートの解答作成の様子

いずれの生徒群も段階的にチャンクを付け足しながら英文を作成することができた。作成する際には、一時間目の段階では、つづりや、定冠詞や前置詞の付け忘れ、代名詞への置き換えミスなど、多くの間違いが見られた。しかし、三時間目になると、そのようなミスはほとんど見られなかった。また、一時間目から始めた英文作成では、チャンクを正しい語順につなげて文を作成する点については、ほとんどの生徒がチャンクを正しい語順に並べかえて、英文を作成することができた。このことは、まず生徒に解答の中心となるチャンクを正しく把握させ、次にチャンクをさらに段階的に付け足し、文を作成させたことが効果的であったからだと考えられる。

右の図6は、各A～C群の一時間目と三時間目に行ったワークシートの正答率の変化を示したものである。どの群も正答率は大きく増加している。特に、B群の正答率は著しく増加し、一時間目の42.4%から、三時間目では68.1%と、25%以上の上昇が見られた。

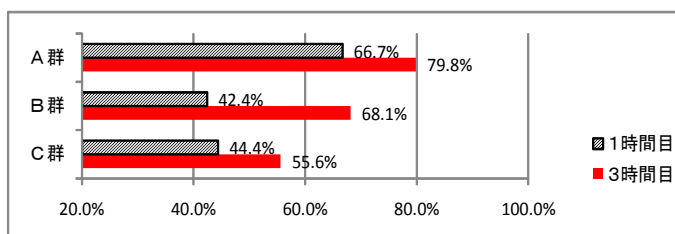


図6 各群生徒の一時間目と三時間目の正答率の比較

(3) 自己評価カードの結果から

図7は、一時間目と三時間目に行った授業後の自己評価カードの比較を示したものである。ここでは、「3. Q&Aでは、相手に分かるように質問することができたか」という質問に対して、「とてもよくできた」「まあまあできた」と回答した生徒は、合わせて全体の85%ほどであったが、三時間目では95%となった。また、「4. Q&Aでは、質問の答えを語順に気を付けて正しく書くことができたか」という項目については、一時間目では、「とてもよくできた」「まあまあできた」と回答した生徒は、合わせて全体の76%程度だったが、三時間目では、約90%に増加した。

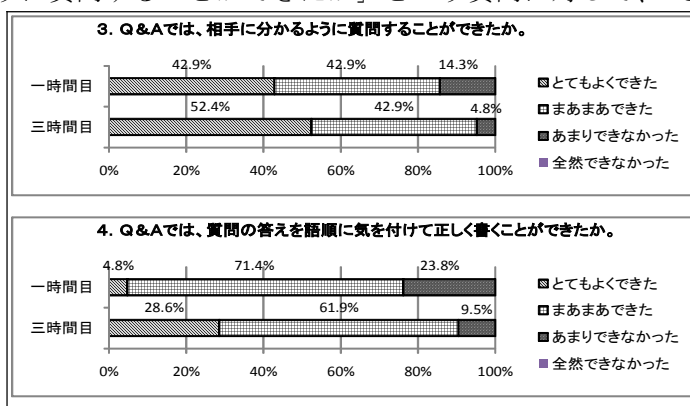


図7 一時間目と三時間目の自己評価の比較

今回の活動についての生徒の感想は下記のとおりである。生徒の多くが、この活動に対して、積極的に取り組みながら、語順を理解できたことが分かる。

- ・相手に分かるように質問ができたのでよかった。(B)
- ・やり方が分かってくると、どんどんできて、楽しかった。(B)
- ・意味のまとまりを考えて書くことができた。(A)
- ・語順を理解することができた。(C)
- ・英文がとてもよく書け、ペアワークの相手とスラスラ書くことができた。(A) ※()内は、生徒群を表す

図8 自己評価カードの生徒の感想(一部抜粋)

授業を録画したビデオやワークシート、自己評価カードの結果から、次のことが分かる。話す活動を行った後に、答えの中心となるチャンクを基に段階的に英文を作成させることが、正しい語順で英文を書くことにおいて有効であったこと。また、上位群の生徒にとっては、チャンクを意識させることが、内容理解を容易にすることに効果的であったことである。

3 英文を作成する段階において、5W1Hの視点で英文を書くことは、感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文をより多く書くことについて有効であったか。

(1) 学習活動の観察から(ワークシート分析)

「7 Sentence Writing」というタイトルのワークシートを使用し、「夏休みの思い出」という内容で、7文以上の英文を書く活動を行った。図9は、実際に生徒が書いた英文である。

- ・I'm going to talk about my summer vacation.
- ・We went to Hukui and Ishikawa with my family, because looked Eiheitemple and Kenrokuen. だれが・どこへ・なぜ
- ・We went there on Bon Festival. いつ
- ・Traffic was very heavy on the streets. どのように
- ・I'm ate sushi.
- ・I bought souvenirs for my friends. 何を
- ・I enjoyed on Bon Festival. どのように・いつ

※5W1Hの視点

A群の生徒が書いた英文

- ・I'm going to talk about my summer vacation.
- ・I went to Osaka with my family. だれが・どこへ
- ・We stayed there from August 13 to 14. いつ
- ・We went to USJ, because my sister and mather love the attractions. どこへ・なぜ
- ・I'm got on the many attractions very much. 何を・どのように
- ・We ate lunch ジャージャーめん and french-fried chicken.
- ・It took 10 hours to go to Osaka very hard, but I enjoyed very much. どのように
- ・I think we can go to Osaka.

※5W1Hの視点

B群の生徒が書いた英文

- ・I'm going to talk about my summer vacation.
- ・I went to Takasaki with my family. だれが・どこへ
- ・I enjoyed shopping. 何を・どのように
- ・I buy ipod.

※5W1Hの視点

C群の生徒が書いた英文

図9 各A～C群の生徒が書いた英文(つづりなどは原文のまま)

生徒は、書き出しにしたがって、与えられた題材について5W1Hの視点に基づいて英文を書くことができた。また、題材から外れることなく、自分の感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文を書くことができた。

表1は、A～Cの各群が作成した英文総数の平均と、その中の感じたことや思ったことが含まれている英文の平均、そしてつなぎ言葉が使用された文の数の平均数を示したものである。今回は7文を目標として活動を行った。A群、B群については、目標を達成し、平均して2文以上感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文を多く書けたことが分かる。C群については、英文数の平均が目標よりもやや少なく、感じたことや思ったことを書けない生徒もいた。単語を並べるだけで、終わってしまっていて、文を構成することは依然として難しいようである。一方、上位群の生徒は、平均するとつなぎ言葉を一つ以上用いて、文と文をつなぎ合わせていた。

表1 各群生徒の英文・感じたことや思ったことの文・つなぎ言葉の平均数

	文の数	感じたことなどを 含んだ文の数	つなぎ言葉 の数
A群	8.7	2.3	1.1
B群	7.9	2.0	0.8
C群	5.3	0.7	0.3

(2) 自己評価カードの結果から

図10は、自己評価カードで、「1. 5W1Hの項目を入れて文章を書くことができたか」という質問についての生徒からの回答である。80%弱の生徒が、「とてもよくできた」又は「まあまあできた」と回答している。

5W1Hの視点で英文を書く活動について、生徒の感想は以下のとおりである。

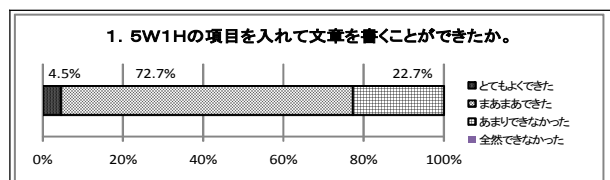


図10 7 sentence writing 活動後の自己評価の結果

- ・英文を前よりもよく書くことができた。(C)
- ・自分の言いたいことが意外とよくまとめられたのでよかった。(A)
- ・文の作り方が前よりもできるようになったのでよかった。(B)
- ・文を長く書くことができたのでよかった。(B)
- ・5W1Hをしっかりと使えるようにして英文を作ることができた。(B)

※()内は、生徒群を表す

図11 自己評価カードの生徒の感想(一部抜粋)

多くの生徒が、今回の活動を肯定的にとらえていたことが分かる。5W1Hの視点に沿ったモデル文を与えたことによって、生徒は、書き出しのヒントを得ることができ、英文をより多く書くことができたと考えられる。以上、ワークシートと自己評価カードの結果から、5W1Hの視点で英文を書くことは、感じたことや思ったことなどの情報を含んだ英文を書くことに有効であったと考えられる。

VII 研究のまとめ

1 成果

- 「聞く」と「書く」の関連付けでは、ICT機器を活用することで、生徒は音声聞き、画面を見ながら本文を読む活動を行うことによって、音声とつづりの関係に気付き、音声と文字を一致させることができるようになった。画面を見て正しく読めたことで、正しくつづりを書けるようになり、書くことを苦手としている生徒にとっては、大きな達成感を感じることができ、英語学習への意欲付けにもなった。
- 「話す」と「書く」の関連付けでは、生徒はチャンクを段階的に加えながら、英文を作成することによって、語順を理解しながら英文を書くことができた。また、英文を書く段階では、授業後の感想に、「会話活動の後に、友達と教え合うことによって、チャンクを並べ替えることが楽しくなった」などといった感想もあったことから、話す活動を行うことによって、生徒同士の学び合いが生まれ、書く活動が円滑に行われたことも分かった。
- 「読む」と「書く」の関連付けでは、5W1Hの視点で書かれたモデル文を提示したことによって、生徒は書き方のポイントや注意点について理解し、より多くの英文を書くことができた。下位群の生徒にとっても、5W1Hの視点は英文を書くヒントとなり、平均して5文以上の英文を書くことができるようになった。

2 課題

- ワークシート「7 Sentence Writing」での生徒へのアンケートで、「2. 前の文にかかわる文を考えて書くことができたか」と質問した。約80%の生徒が、「とてもよくできた」又は「まあまあできた」と回答している(図12)。しかし、18.2%の生徒が、「あまりできなかった」と回答している。このことから、生徒の文章は情報量は増えたが、まとまりのない文章であることが分かる。文章のまとまりを意識して、つなぎ言葉や前の文を受けてさらに詳しい情報を加えるなどして、論理的な文章を書かせるような指導が必要である。
- 自分の感じたことや思ったことを含んだ文を書くためには、5W1Hの項目を含んだモデル文だけではなく、多様なモデルを生徒に提示することが必要である。そのためには、指導の時間を確保し、モデル文については、一つの型だけを提示するのではなく、いろいろなモデル文を生徒が選択できるように工夫することが重要である。
- 今回の研究で、一時的に「書く力」が向上したことは検証できたが、教科書の一単元の実践で「書く力」が高まったと言い難い。生徒が「書く力」を向上させていくためには、三年間を見通した長期的な計画の下に、四技能を関連付けた活動を、段階的に行っていく必要がある。

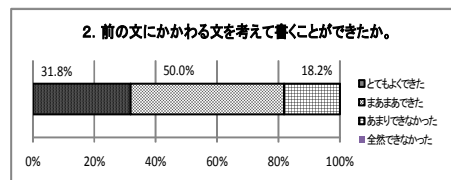


図12 ワークシート「7 sentence writing」を活用した活動についてのアンケート結果

<参考文献>

- ・ベネッセ教育研究開発センター 『第一回中学校英語に関する基本調査報告書【生徒調査】』(2009)
- ・杉本 宣昭 「英語チャンク学習法」 宝島社新書(2006)
- ・吉田 晴世 『特集 ライティング指導を考える 「書くこと」の指導』 三省堂(2007)